

新品種栽培へ臨む農家の思い

平成28年に誕生した埼玉県独自の品種のイチゴ栽培に、いち早く取り組んだイチゴ農家がある。

久喜市にあるいちごの関園で栽培する関裕一さんに日ごろのイチゴ栽培や新品種のみあまりんについて聞いた。

食べた人の笑顔がイチゴを作る一番の喜び

久喜インターチェンジから車で西へ10分ほど、住宅と田畑の広がる一角に、白いビニールハウス（以下、ハウス）が何棟も建っている。関裕一さんの家族が経営する、いちごの関園（以下、関園）だ。

関さんは、祖父の代から始めたイチゴ農家の三代目。現在は、両親、妻と共に約1千200坪、4つのハウスを切り盛りしている。祖父の頃は、イチゴは米作りの裏作だったという関さん。「稲刈りが終わると、田んぼに小さな簡易ハウスを建て、イチゴを作って

いました。田植えの時期がくると支柱を抜いて、ハウスを撤去していったんです」と話す。

やがて父の光一さんが畑に連棟ハウスを建て、イチゴはそこで作るようになる。

幼少期から家族の仕事を見て育った関さんにとって、農業を継ぐのは自然の成り行きだった。久喜工業高等学校を卒業後、会社員を経験。その後、埼玉県農業大学の園芸科施設野菜を専攻、イチゴ農家の道に入り今年で14年を数える。

今シーズンに作付けしたのは、かおり野、とちおとめ、そしてあまりんの3品種。試作で恋みのり

も少し作っているという。昨シーズンは試作品を含め8品種を育てたが、今年はそこから種類を絞った。イチゴは、品種によって必要な水と肥料の量が異なる。品種が増えるほど、管理の手間も必要なためだ。

イチゴの栽培は、春に親苗を植え、子苗を育てハウスに植え込み、摘み取るまで8カ月ほどかかる。その後11月から5月の7カ月間はずっと収穫期間が続く。このサイクルと並行して翌年の苗作りも行つたため、ほぼ1年中イチゴの世話にかりきりだという。「イチゴを育てる苦労は気になりませんが、収穫で腰を曲げ続けていたら、ひどい腰痛になってしまいました」と、関さん。

摘み取ったイチゴは、実をチェックしながら家族でバック詰めしていき。選果室の一角では販売もしており、イチゴを買い求める人の声が直接耳に入る。「イチゴは、子どもたちが大好きです。だから、おいしいと言ってくれる子どもたちの笑顔を見る瞬間がいちばん嬉しいですね」と、関さんも笑顔を見せた。

開発者の思いに触れあまりんの栽培に挑戦

関園で作っているあまりんは、平成28年に完成した埼玉県オリ

イチゴの赤い実は果実ではなく、花托(かたく)と呼ばれる雌(め)しべの土台部分が育ったものだ

あまりんの実は、整った円錐形で鮮やかな赤みがあり、果肉は淡い赤色。中も芯の近くまで赤い

収穫したイチゴは選果室で一つひとつ目で確認し、手作業でバックに収めていく

フリマARで動画が見られます



受粉はミツバチを使って行う。花のつき始めから収穫期間が終わるまで、ミツバチも仕事に勤む



あまりんの葉の茂り具合などを見て、生育の度合いを確認する関裕一さん



ぜて栽培していく予定だ。

「近年のハウス栽培では、環境制御という考え方が指導機関から言われています」と、関さんはいう。これは、植物を人工的に整えたハウスの環境に慣れさせるのではなく、自然な生育状況にハウスの環境を合わせていくという考え方だ。

イチゴは本来、初夏の作物なので、暖かいほど成長していく。しかし、育ちやすいからと水や肥料、湿気を与えすぎると味がぼやける。冬のよりに厳しい環境の方が、食味は良くなるのだそう。だ。「植物に合わせた栽培方法を用いながら、いかにおいしく作るかの調整が、いちばん難しいですね」と、関さんは話す。

あまりんに続き、今後も新しい品種は次々と開発されていくだろう。関さんは、「新しいものは、ぜひ栽培してみたいです」と力強く語った。「時代によって、ニーズもお客様の好みも変化します。なにより、自分自身が新しいことに挑戦してみたいのです」。

小さな一粒に込められた、食べた人を笑顔にしたいという思い。いちごの関園と関さんの挑戦は、これからも続いていく。

いちごの関園の皆さん。左から、関裕一さん、理恵さん、福子さん、光一さん



いちごの関園
久喜市菖蒲町台2400
TEL.0480-85-1425

フリマAR
アプリを
ダウンロード

App Store からダウンロード
Google Play で手に入れよう
「フリマAR」を検索
*AppleおよびAppleロゴは米国その他で登録されたApple Inc. の商標です。App Store®はApple Inc. のサービスマークです。
*Google Play および Google Play ロゴは Google Inc. の商標です。